



松江城前にて

歴史研修（その5）

2014年4月17日(木)～18日(金)



山陰の城めぐり

初日は和鋼博物館を経て、山陰・山陽の11力国を手中に収めた尼子氏の本城である月山富田城を訪れ、玉造温泉に宿泊。二日目は平成の大遷宮で生まれ変わったばかりの出雲大社に参拝し、松江城を見学しました。



出雲大社に参拝

解説

静岡大学名誉教授

小和田 哲男さん

安来市歴史資料館

戦国時代から近世初頭にかけて出雲国の政治・文化の中心であった月山富田城跡に隣接している安来市歴史資料館。安来市の古代から近世にかけての歴史を「いにしへの安来」「富田城と



たたら炉に空気を送り込む天秤鞆を体験する参加者

和鋼博物館

島根県安来市にある和鋼博物館には、たたら製鉄とその歴史・流通など、さまざまな匠の技が紹介されています。安来港は江戸時代から鉄や鉄製品の積出港として栄えてきました。安来市内南部の広瀬町や奥出雲町などは、野だたらによる鉄の生産地として発展。一時は国内の7〜8割を生産する地域となりました。現在でもこの地は日本刀の材料となる玉鋼など特殊鋼産業が主要な産業となっています。

月山富田城



山中鹿介の鎧で安来市観光協会がお出迎え

乱世「新しい社会へ」に分け、展示されています。ここでは月山富田城の城主だった尼子・毛利・堀尾3氏の遺物や、富田川氾濫で水没した富田城下町の遺構・富田川河床遺跡からの出土品など、安来市の歴史や文化を総合的に紹介しています。

歴代の出雲守護職の居城で、

戦国時代には尼子氏の本拠地となり、山陰の要衝の地となった月山富田城。尼子氏は中国地方の覇権を巡って周辺諸国と争い、尼子経久が出雲に基盤を造り上げた後、嫡系・尼子晴久の代に山陰・山陽八ヶ国守護の大大名となりました。

月山富田城は天然の地形を利用した、難攻不落の要塞城と言われ、「天空の城」とも呼ばれています。この城を巡って何度も攻



月山富田城の心臓部だった山中御殿。3,000平方メートルもの広さを持つ



月山富田城本丸までの道のりは険しい

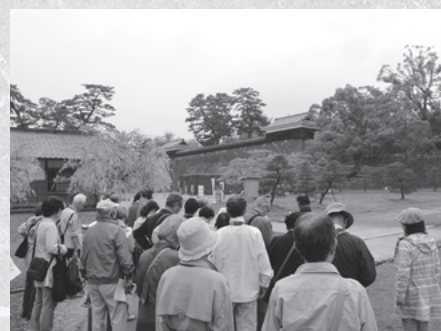
防戦が行われ、尼子氏が毛利氏に滅ぼされたことにより毛利領となりました。慶長5(1600)年、関ヶ原の戦い後に堀尾氏が城主となり、慶長16(1611)年、堀尾忠氏が城を松江城に移し、廃城となりました。

松江城

松江市街の北部に位置し、南に流れる京橋川を外堀とする松江城は輪郭連郭複合式平山城です。六道湖北側湖畔の亀田山に築かれ、日本三大湖城の一つでもあります。慶長15（1610）年に天守が完成。これは現存する天守の中でも古いもので、鉄砲

を意識した構造になっています。関ヶ原の戦いで勝利を収めた徳川方（東軍）に付いた武将は各地に領地を与えられました。堀尾忠氏もその一人です。もともとは、遠州（現在の静岡県浜松）の12、13万石の城主でしたが、外様大名だったこともあり家康の意向で、江戸から遠くに飛ばされました。そんな忠氏が与えられたのが月山富田城です。しかし月山富田城は山城。交通

の便が悪いことから、父・吉晴とともに新しい城・松江城の建設を検討します。すでに吉晴は忠氏に家督を譲っていました。城地選定を巡り、二人は対立してしまいます。そのさなか忠氏は病に倒れ、そのまま病死してしまいました。残された吉晴は息子が候補としていた場所に松江城を築きます。



松江城二の丸下の段にて

武将とリーダーシップ

戦国武将のリーダーシップというと織田信長のような武将を思い浮かべる方も多いかもしれませんが、しかし、そのような武将は少数派です。例えば、NHKの大河ドラマ「黒田官兵衛」に登場する小寺政職は、優柔不断な面が強調されていますが、実際はそうではなく、まず部下たちに意見を言わせ、良い意見を取り入れたつ、最終決断を行っていました。これが当時の武将の在り方でした。

山中鹿介幸盛

月山富田城の太鼓壇公園には山中鹿介幸盛の銅像が建てられています。「山陰の麒麟児」とも

言われた山中鹿介。兄に変わって家督を継ぎ、尼子晴久の嫡男・尼子義久に仕えますが、永禄5（1562）年から始まった毛利元就の出雲進軍により、尼子氏は毛利に破れ、義久は幽閉されてしまいます。鹿介は主君・尼子家の再興を目指し、出家していた尼子勝久を還俗させて擁立するなど主君のために奮闘します。しかし、毛利輝元との戦いで敗戦。上月城の戦いで織田信長に援軍を依頼しましたが、助けが来ることはありませんでした。

ちなみに山中鹿介にはファンも多くいますが、元々は明治時代に大町桂月が書いた『山中鹿介の言葉』「我に七難八苦を与え給え」には彼の生き様が表れて

いるように思います。



山中鹿介幸盛の銅像前で解説をする小和田先生

毛利両川

上月城の戦いで山中鹿介を破った毛利軍。そこで活躍したのが吉川元春と小早川隆景です。

彼らは毛利元就の次男・三男で、毛利本家を守る「毛利両川」と呼ばれていました。互いの性格を表すエピソードがあります。備中高松城の戦いで豊臣秀吉と戦っていたときのこと。織田信長の死を知った秀吉は、明智光秀を討つべく交渉内容を譲歩し、和平を急ぎます。毛利軍が信長の死を知ったのは、備中高松城城主・清水宗治の切腹直後。元春は秀吉軍の追撃を主張しましたが、隆景は「和平交渉したばかりで約束を反故できない」と押しとどめました。これは隆景が秀吉の力量を評価し、先を見通したものと考えられています。後の豊臣政権下でも、毛利家を守るべく毛利両川は活躍しましたが、秀吉は元春を冷遇し、隆景を優遇したそうです。

歴史 マメ知識 ①

かかれ太鼓に退き鐘

月山富田城には太鼓壇と呼ばれる場所があります。ここはその名の通り、太鼓を置いていた場所です。普段、武士は城下で生活し、有事の際に城に集まり戦いに赴きます。彼らを招集する際に用いていたのが太鼓です。

太鼓の音色には士気を向上させる役割がありました。逆に退く際には鐘を打ち鳴らしたことから、「かかれ太鼓に退き鐘」と言われています。太鼓壇のような場所はこの城にもあったと思われるのが、月山富田城のように現存しているものは注目値するでしょう。

歴史 マメ知識 ②

石積みと石垣

城の柵の種類として、石積みと石垣があります。素人でも積めるのが石積み、石工しか組めないのが石垣と言われています。技術的な側面からいうと裏込めがあるのが石垣、ないものが石積みです。また石の加工による分類もされており、自然石をそのまま積むのが野面積み。石の角や面を叩いて形を整えてから積み上げるのが打ち込み接ぎ、石がぴったりと密着するように四角く整形したものを切り込み接ぎと言います。

また、石垣の中には、「○」や「△」などのマークが付いているものがあります。これは刻印というもので、工事に携わった大名を表すものになります。